

しんらん同人

No.588

9・10
月号

浄土真宗本願寺派 誓願寺

〒171-0052 東京都豊島区南長崎1-3-8

【電話】03-3950-7828 【ホームページ】<http://www.seiganji-tokyo.jp/>

安心して死ぬ

誓願寺 初代住職 故岡本泰雄

結局はみんなこの人生を本当に寂しいことであっても、さよならしていかんやならん時がやがて来るわけでありま

す。
そうしますと安心して生きる、安心して死んでいけると
いうことは、いつ、どこでどうなってもよろしいという気
持ちで生きることが、本当に安心して生きられることでは
よう。

どうなるのかなあ、先のことがさっぱりわからないな
あ、という不安があったら、今日が不安になるんです。明
日が不安なのではなく、今日が不安心配なのですね。

だから後生の一大事が解決して、如来様のお計らいひと
つよと、お慈悲にまかせて、安心して生きるということが
本当に今生きているということではないでしょうか。

これは何をもってきても解決のしようもない。本願を信
ずるといふ如来様のお計らいに任せるといふほかにないの

ですね。そういった根本の問題、人間の究極の問題をとき
ほぐして、どうすれば如来様のご本願を信ずることができ
るのかというのを、こまごまとお説きくださっているの
が、安心決定抄であります。

安心決定抄に「念仏の行者、名号を聞かば、ああはや我
が往生は成就しにけり、十方衆生往生成就せずば、正覚取
らじと誓ひたまひし、法藏菩薩の正覚の果名なるが故にと
思うべし」

南無阿弥陀仏という名を聞かしてもらったら必ず救う
ぞ、まちがわさんぞというお誓いが出来上がったのが南無
阿弥陀仏の名号でありますから、この名号を聞いたら、あ
あはや我が往生は成就しにけり、この名号の上に私の往生
はもう解決されておったのだな、こう頂戴すべきである
と。

合掌

今号では「歎異抄（たんにしょう）」全十八条のなかの第九条を掲載いたします
お時間のある時に是非「原文と訳文」を【声に出して】読んでみてください。

第九条

ひろ
「念仏もうしそうらえども、踊躍歡喜のころおろそかにぞ
「念仏申しておりますのに、
「踊り上がるような喜びの心はあまり起きて来ません。」

うろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきこころのそうらわぬは、
じょうど「また急いで浄土へ行きたいと思う心は、
き「まるでないのだが、

「私・唯円がお尋ね
いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん」と、もうしきれ
「これはどう考えたらよいのでしょうか？」と、

てそうらいしかば、「親しんらん縛ふしんもこの不審ありつるに、唯ゆい円えん房ぼうおなじこ
「親しんらん駕がも、このことを疑問に思っていましたたが、唯ゆい円えん房ぼうよ、あなたも同じ疑

ころにてありけり。よくよく案じみれば、天におどり地におどる

「いよいよ浄土に生まれること間
おうじよう いち
いよいよ往生は一
よるこばぬにて、
よるこばきことを、
「喜ばない私共こそ。」

ほどこよろこぶべきことを、
どに喜ばねばならないことを、

定とおもいたまうなり。
 よろこぶべきところをおさえて、よ

ろこばざるは、
煩惱ほんのうの所為しよゐなり。
「煩惱の仕業なのです。」
「だからこそ、仏はそれの事を知り抜いておられて、
しかるに仏かねてしろしめして、

煩悩具足の凡夫とおおせられたることなれば、
他力の悲願は、

はおかないという悲願は、「このようになかなか喜ばない我らのためのものであった、かくのごとし、われらがためなりけりとしられて、」と知ることが出来て

いよいよたのもしくおぼゆるなり。
また浄土へいそぎまいりたき
じょうど
「いよいよ頼もしく思われることであります。
「また浄土へ急いで往きたいという心は無く、

「このころのなくて、いささか所^{しょうらう}労^{らう}のこともあれば、死^しなんずるやら
「死ぬのではないかと、

ほんとこころぼそくおぼゆることも、
 煩惱はんのうの所為しよゐなり。
 久遠くおん劫くわうより
 「心細くなってしまふのも、
 「煩惱はんのうの仕業しぎやうなのです。
 「久遠くおんの昔むかしから今日

いまだうまれざる安あん
いまで流転りゅうてんせる苦悩くのうの旧里きゆりはすてがたく、
「まだ生まれたこのない安養の浄土」
まで迷いに流されて来た苦悩の世界へのこだわりはなかなか捨てられず、

養ようの浄土じやうどはこいしからずそうろうこと、まことに、よくよく煩惱ぼんのう「いよいよ煩惱ぼんのうが盛んだ」
は恋しくもないのは、「本当に、」

「この世の縁が尽き
娑婆の縁つ
なごりおしくおもえども、
の興盛にそうろうにこそ。
「どんなに名残惜しいと思つても、
からなのであります。」

きて、
ちからなくしておわるときに、
かの土へはまいるべきなり。
「彼の阿弥陀仏の浄土へは参ることが出来ないよう果てて、
「力無く死んで行く時にならないと、

いそぎまいりたきこころなきものを、
ことにあわれみたまう
です。」「阿弥陀仏は、急いで浄土へ往きたいと願う心が無い者を、
「ことさらに哀れんでいくのださるのです。」

なり。これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生

けつじょう　ぞん　　ゆやくかんぎ　　じょうど
は決定と存じそうらえ。踊躍歡喜のころもあり、いそぎ浄土へ
浄土往生間違いないと思えて来ます。「もし躍り上がるほどに喜ぶ心があり」「急いで浄土に参りたく

もまいりたくそうらわんには、
ほんのう煩惱ぼんのうのなきやらんと、あやしくそ
 「自分には煩惱が無くなったのだどうかと、」かえつて望しきな

「うらいなまし」と
うんぬん
云々
「親愛聖人からお聞きしました。」

妙好人とわたし

誓願寺 前住職 故 岡本泰仁

妙好人・庄松が本堂の仏間で寝ていた。すると他の同行がびっくりして「庄松さん、如来様の前で、そんな無作法はもったいないじゃないですか」とたしなめると、「あんたの親は、ママ母かね」と言ったそうです。

たしなめた同行の気持ちは、もっとも常識的で、尊い仏前で寝そべるなど不謹慎だというのは当然でしょう。

しかし庄松は「如来は真実の親であるから、親の前で何の遠慮があろうか」という気持ちである。

これは妙好人庄松の体験である。庄松のこの行為が尊いのではなく、如来のお慈悲をわがものとして頂いたその心が尊いのである。庄松がそうしたから私も同じようにしようと考えたのなら、とんでもないことである。

人の体験を通して聞かせてもらうのは「法」そのものである。「法」は人によって伝えられるものであるから、人も大切ではあるが、「法」そのものを聞かないで、人だけに目を奪われてはならない。「法」は語られている人によって尊いのではなく、また、書かれた人によって有難いのではない。「法」そのものが尊く、如来の本願が有難いのである。向こうから届けて下さるお慈悲を、そして真実を頂くばかりである。

理屈だけでもいい、体験だけでもいい、語る人、語る方法を問題にせず、如来の本願を聞くのみである。



合掌



ご法座等 のご案内

どなたでもご自由に参加いただけます。
参加費は無料です。



9月

9・14
(日)

■午前十時～

定例法座・婦人会物故者追悼法要

【平田聖子師（愛知県）】

■正午～

医療相談

【佐藤公彦医師】

9・21
(日)

■午前十時～

なかよしクラブ

(乳幼児から小学生までとその保護者)

9・28
(日)

■午後一時～

彼岸会・祥月命日合同法要

【古賀明徳師（誓願寺副住職）】

10月

10・12
(日)

■午前十時～

定例法座

【葭田誓子師（大阪府）】

■正午～

医療相談

【佐藤公彦医師】

10・19
(日)

■午前十時～

なかよしクラブ

(乳幼児から小学生までとその保護者)

10・26
(日)

■午後一時～

定例法座・祥月命日合同法要

【喜田唯信師（大阪府）】

閑話休題

ここで質問を一つ。

仏様の願いにかなった生き方とは？ 編集後記をご覧ください。

われもひかりのうちにあり

誓願寺住職 古賀尚之

先日高校一年生（満十五歳）の少年の葬儀を、多くの級友の参列と涙の中で執り行いました。

「愛別離苦」親しい方とのお別れ程悲しく耐えがたいものではありません。改めて、失って初めてその大切さが分かる事柄が私たちの周りに数多くあり、そのことに気付いていない自分をしみじみと思わせられたことでありました。

何よりも今日一日を、皆さまと大切に生き抜きたいものです。

編集後記



・「閑話休題」の問いに対する言葉といたしまして、故 梯 實圓（カケハシジツエン）和上の専精舎法話でのお言葉を掲載いたします。皆さまの様々な感想をいただければ幸いです。

仏様の願いにかなった生き方とは、本願の名号を疑いなく聞き受け、そして願いにしたがって生きていこうとすることです。仏様は私たちに「どうか助かってくれよ」と願っていらっしやいます。

